

8. 笠師保の結婚について

松 井 史 織

- I. はじめに
- II. 後継ぎ
- III. 結婚までの過程
- IV. 町の対策
- V. 考察

I. はじめに

中島町笠師保地区における調査の際、住民から「若い人がなかなか結婚しない」とか「うちの子どもが30歳になっても結婚しない」という声が多く聞かれた。全国的な晩婚化の傾向がこの地区にも現れているのかと思ったが、話を聞いていくうちにこの問題がこの地区に特徴的な問題と複雑に絡み合っているのではないかと考えるようになった。

現在の笠師保における未婚者の割合をみると(表-1参照)、圧倒的に男性の方が多いことが分かる。これはこの地区において、男性とくに長男が後継ぎとして家に残ることが期待されているのに関係しているのではないかと考えた。

また、結婚へ至るまでの過程がかつては見合いによるものがほとんどだったが、最近では恋愛によるものが多くを占めるようになったことも未婚者の増加に関係しているのではないかと考えた。以上2点について、II.、III.で述べる。また、未婚者数の増加は笠師保地区だけでなく中島町全体のことなので、町がその現状をどう考え、それに対してどのような対策をたてているのかを調べた。これは、IV.で述べる。

表-1 笠師保における既婚者・未婚者の比率(2000年)

	男性				女性			
	既 婚	未 婚	全 体 数	未婚者の割合(%)	既 婚	未 婚	全 体 数	未婚者の割合(%)
20歳代前半	1	34	35	97.1	1	20	21	95.2
20歳代後半	4	23	27	85.1	9	15	24	62.5
30歳代前半	13	9	22	40.9	19	3	22	13.6
30歳代後半	16	11	27	40.7	22	2	24	8.3
40歳代前半	25	6	31	19.3	37	2	39	5.1
40歳代後半	35	6	41	14.6	31	1	32	3.1

町役場資料による

Ⅱ. 後継ぎ

私は、笠師保地区で女性に比べ男性の方が未婚率が高いのは、男性の多くが後継ぎとして地区に残ることを期待され、また本人も止むを得ないことと受け止めているからではないかと考えた。そのことは表-2A、Bから読みとることができる。これらの表から、女性に比べ男性の方が圧倒的に結婚後笠師保に住む確率が高いことが分かる。これは、多くの男性が後継ぎとして家に残ることを示している。逆に女性は、結婚相手も笠師保出身者である場合を除くと、結婚後地区に残るのは稀なことであるのが分かる。

では笠師保地区の人々はみな、後継ぎを残したいと考えているのだろうか。

そのことについて話を聞くと、60歳代や70歳代の人と、30歳代や40歳代の人とでは考えが違うことに気づいた。

孫のいる60歳代、70歳代の人には、長男は家の後を継ぐものだという考えが当たり前のこととして受け入れられていた。自分の子どもに対してはほとんどの人が後継ぎになることを期待している。また、多くの人が長男というものは家に残るものだという考えを小さいときから子供に言い聞かせている。孫に対しては、後を継いでほしいという希望をもっている人がほとんどだったが、子供に対しての気持ちと比べると人によるばらつきがあった。A氏(60歳代の男性)は、孫の男の子2人に時々冗談交じりで以下のような話をする。上の男の子には、「長男だから、勉強してしっかりしてこの家を守ってくれ」、下の男の子には、「次男だからここには残れない。どこででも生活していけるようにしっかり勉強して、人にかわいがってもらえる人になりなさい」と。この方の場合、孫にも後継ぎになることを強く期待しているのが分かる。しかし中には、自分の子供ではないのだから好きにすればいいという考えを持っている人や、後を継いでほしいとは思いうけれど孫には強制はしないという人がいた。話を聞いた人全体の印象として、孫に対しては後を継いでほしいという希望はあるものの、子供に対するそれと比べると是が非でもという思いが弱くなっていると感じた。

子供を持つ30歳代、40歳代の人々の考えは、彼らの親世代と比べるとかなり違ったものだった。子供に後を継がせることについて話を聞くと、それを考えていないという人や、後を継がなくてもいいという人や、子供がしたいようにすればいいという人がほとんどだった。自身が後を継いだことについては、仕事を他でも探したけれど見つからなかったため、こっちに残った、なりゆきで後を継ぐしかなかったという人もいたが、多くの人は自分から後を継ごうと思い、それは自然なものだろうと受け入れていた。

では後継ぎというのは、何を継ぎ、何を担わなくてはいけないのだろうか。

この答えは、世代や男女の違いというよりも個人個人で違うように感じた。資産を継ぐ

という答えはどの世代でも聞かれた。資産は家そのものや、その家が所有する山林や田畑である。先祖から受け継いだものを渡したいという考えや、資産の責任の所在をはっきりすることで争いをなくすことができるという考えから資産を継がせたいと考えているようだ。また山林や田畑の管理については、口頭で代々伝えられてきたことがあるのでそれを言い伝える相手が必要だ。変わったものでは、神様のお世話をする者が必要だというものだった。神様というのは、話を聞いた人の中で敷地内に小さな神社を持っている例があり、この世話をしていかななくてはならないということだ。墓については、大切にしてほしいという人もいれば、それほどこだわっていない人もいた。B氏(60歳代の女性)は、無縁仏にはなりたくない、1年に一度ぐらいは墓の世話をしてほしいと言われた。対して、C氏(70歳代の男性)は、墓は残るものだし寺に預けたりもできる。外に出ても参るために帰ってくることはできる。墓は後を継いでほしい理由にはならないという考えを持っている。

家の「名」を残すということは当たり前のこととして認識されていた。人によってそこに伝統を継ぐことが加わったり、家業を継ぐことが加わったりした。

家の後を継いで家に残ることは必然的に、家にいる親の面倒をみることにつながる。そのことはみな漠然と意識しているようだった。D氏(60歳代の女性)は、昔と今とでは親の面倒をみるという意味が変化していることを指摘した。かつて家の収入の多くを農業に頼っていた頃は、財産を後継ぎに譲った老人たちは経済的に自分たちだけで自分たちの面倒を見ることは不可能だった。しかし、今は年金があり経済的には後継ぎに面倒を見てもらう必要はなくなった。後継ぎに期待するのは経済的なことではなく、精神的なことなのだ。老人ホームに入ることになってしまったに顔をだしてくれればそれでいいのだという人もいた。

家を継ぐことについての心構えも聞いた。近所の人や親戚に迷惑をかけて、この地を離れることになるのは避けたい。先祖から続く親戚関係の維持に努め、自分の家だけでなく他の家とのつきあいをして協力し合う、日ごろのつきあいを大切にする。このようなことに心がけて家を継いでいってほしいということだった。

ところで後を継ぐことを期待される人たちは、笠師保地区にきてくれる結婚相手を探すことになるが、ここは外からくる人にとって抵抗を感じるような場所なのだろうか。

III.で述べるが、1960年代までに結婚した人の多くは親によって一方的に決められて結婚している。そういう人たちは、親のいうことに従うのが当たり前で、笠師保地区が嫌だも良いもなかったという。30歳代、40歳代の女性は見知らぬ土地ということで漠然とした不安を抱えて嫁にきたようだったが、自分の住んでいた土地との違いを認識し、実感するのは結婚後のようだ。

笠師保地区に対する抵抗ゆえにそこで後を継ぐ人との結婚をためらうということは感じられなかった。

表-2A 笠師保地区出身者の結婚後の住所(人数)

結 婚 年 代	男 性 が 笠 師 保 出 身 者					女 性 が 笠 師 保 出 身 者					男 女 合 計
	県 外	県 内	町 内	地区内	合 計	県 外	県 内	町 内	地区内	合 計	
1970年代前半	51 (1)	25 (1)	2	48 (5)	126	55 (1)	50 (1)	11	7 (5)	123	249
1970年代後半	22	16	2	27 (2)	67	43	39	12	8 (2)	102	169
1980年代前半	20	18 (1)	2	36 (3)	76	24	34 (1)	4	12 (3)	74	150
1980年代後半	15 (1)	10	6	15	46	17 (1)	27	4	2	50	96
1990年代前半	19	17 (1)	16	6 (4)	58	12	28 (1)	2	4 (4)	46	104
1990年代後半	19 (1)	9 (1)	2	12 (2)	42	21 (1)	26 (1)	3	28 (2)	52	94

() 内の数字は、男性、女性ともに笠師保出身者である場合の数

表-2B 笠師保地区出身者の結婚後の住所の割合(%)

結婚年代	男性が笠師保出身者				女性が笠師保出身者			
	県外	県内	町内	地区内	県外	県内	町内	地区内
1970年代前半	40	20	2	38	44	41	9	6
1970年代後半	33	24	3	40	42	38	12	8
1980年代前半	26	24	3	47	32	47	5	16
1980年代後半	32	22	13	33	34	54	8	4
1990年代前半	33	29	28	19	26	61	4	9
1990年代後半	45	21	5	29	40	50	6	4

『広報なかじま』による

Ⅲ. 結婚までの過程

結婚までの過程はこの50年余りで大きく変化した。

1960年代までは、見合いによる結婚が大半を占めていた。その過程は、まず適齢期を迎えた子どもを持つ親が仲人のところに話をもち込むことで始まる。仲人にもいろいろな種類があり、これを商売としている人もいたし、親戚や近所の人のお世話をするだけの人もいた。まずはじめに親戚や知人でお世話をしてくれる人に話しをもっていき、それでうまくいかない場合に仲人を商売にしている人に話しが持ち込まれた。仲人は自分の持っている情報の中から、家柄などの釣り合いがとれる相手を選ぶ。結婚相手は親と仲人によって

一方的に決められ本人に打診されることは余りない。1940年代の後半に結婚したE氏(70歳代の女性)は、一度目は親が勝手に出かけて話をまとめてきて、二度目に突然「今から連れて行くから部屋を片づけておけ」といわれたそうだ。また、打診どころか相手の顔さえ知らされていないことすらあった。1950年代の後半に結婚したF氏(60歳代の男性)は結婚式当日まで相手の顔も知らなかったという。B氏の結婚式は、自身はほとんど式に参加しない方式だった。そのためB氏は夜にこっそり屋根裏から花嫁の顔を覗き見て、「あれが自分の嫁さんか」と思ったという。親の兄弟が相談して、自分の子ども同士を結婚させる場合もある。1950年代に結婚したG氏(60歳代の男性)は、小さい頃から年ごろになるまで、互いに行き来して遊んでいたとこと結婚した。

このころの結婚は、本人の意思を確認せず親と仲人によって勝手に相手を決められるものだった。しかし、本人たちは結婚とはそういうものと思い、反発することはなかった。そういう結婚をすることが親孝行であると考える人もいた。逆に恋愛によって結婚した人は少なく、近所から「おしかけ嫁」などといわれたりすることもあった。

このように親によって一方的に決められる結婚も、1960年代に入った頃から少しずつ減っていく。職場などでの出会いをきっかけにした恋愛によるものや、見合いでも本人の意思が尊重されるようになった。

1970年代前半に結婚したH氏(50歳代の女性)は、金沢の出身で職場で出会った恋愛結婚だった。仲人もお互いの出会いや、結婚までの過程を世話した人ではなく職場の上司をお願いしたという。

1980年代前半に結婚したI氏(40歳代の男性)は、親が「誰かいい人はいないのか」とたずねたところ、「そんな人いない」と答えたため、親が見合いの段取りをつける。見合いのあと、しばらく付き合ってから結婚をする。この場合、以前のように親が一方的に相手を決めるのではなく、あくまで最終的な決断は本人に委ねられている。

これまでの仲人は、相手を探し、結婚式まで完全に世話をする人だった。親が話を持ち込む仲人の多くは女性で、家の釣り合いなどのことを考慮できるある程度年をとった人がした。恋愛結婚が主流になるにつれ、仲人は形式的な色合いを強めていった。

しかし、結婚を初めから終わりまで世話をする仲人が消えたわけではなく、依然そのような人は残っている。

数十年仲人をやってきたJ氏(70歳代の女性)に話をうかがった。彼女は母が以前から仲人の仕事をしていたのを継いだような形で仲人を始めることになった。母のところには、母の郷里である田鶴浜から「笠師保にいいお嬢さんはいませんか」と適齢期を迎えた息子を持つ親がちよくちよく相談に来ていたという。彼女も同じようにしていたところ、七尾市にある平安閣から「出雲会」に入りませんかと打診があった。「出雲会」というのは、

平安閣が組織している仲人グループのことで、月に1度ある会合にそれぞれが情報を持ち寄り、それを互いに交換し、結婚を仲介する集まりだという。J氏は17、8年前からこれに参加したが、当初は勤めに出ていたためそれほど会合には参加できなかったそうだ。この会のメンバーは、始まった頃は17、8人おり、それぞれの居住地は羽咋市から中島町にまたがったという。

彼女は、親から話しを持ち込まれると、履歴書と写真を持参するように言い、学歴などの釣り合いがとれる相手を紹介する。彼女はこんな風に頼られるのは信用があるからで、それに答えるためにただ紹介するだけでなく、紹介する相手の様子なども詳しく知る必要があるという。そのため、彼女は自分で相手の家の様子をうかがいに行く。

このような仲人の人が依然残っている背景には、嫁をもらうにしろ、婿をとるにしろ、家の後を継ぐため笠師保地区に残るという条件を前提に結婚へつながるつきあいをするということは難しいということがあるのだろう。見合いでは、双方の都合が考慮された相手が用意され、互いに互いの都合を了承しているので結婚への道のりがスムーズに運ぶ。親が一方向的に決める結婚は、子どもに対して余りに傲慢かもしれないが、イエの継承を第一に考えた時最も効率的なやり方だといえる。

最近ではさらに出会いの形は多様化し、青年団で知り合う人もいれば、民間の結婚相談所を介したもののや、携帯電話のメールで知り合ったりする例もある。

IV. 町の対策

婚姻数の減少と、町出身の若者が結婚しても町にもどってこない状況を危惧した町はいくつかの対策を打ち立てた。成立した順に紹介する。

1990年に結婚祝金の交付がはじまる。これは中島町が過疎団体に指定されたことを契機に誕生した中島町定住促進に関する条例に含まれている。これには新規就労者報奨金、出産祝金の交付も含まれている。

結婚祝金の交付を受けられるのは、「在町者であって婚姻届をし、引き続き住民として届け出た者」であり、出産祝金の対象は「在町者夫婦間の出生児」になる。結婚祝金は夫婦1組を単位として1組につき10万円の祝金が出る。これは自己申告制で行われ、町役場によると条件をみたすほとんどの夫婦が受け取っているということだ。

1994年4月には、結婚相談窓口を町役場内に開設する。これは町の人口減少の要因は子どもの減少と結婚難ではないかという声を受けての措置だった。主な業務は「登録」「相談」「お見合いイベント」だ。「登録」は事務局が行い、未婚者の調査及び台帳の作成及び管理、整理を行った。

また、未婚者の登録を希望者に限り、登録調書に基づき登録業務を行った。登録された情報は相談者の希望に応じて提供された。「相談」は、役場内に設置された相談専用電話や民間に委嘱した相談員によって行われた。相談員は笠師保を含む6地区にそれぞれ1人ずつおり、それぞれの地区を中心に未婚者の情報収集を行い、住民からの結婚相談を受けた。「お見合いイベント」は日帰りの小旅行や、町内の演劇堂での観劇のあと会食などが行われた。

しかし、このシステムはいくつかの問題を抱えていた。まず、相談に来る人がほとんどいないということだ。役場によると、年間に3件ほどの相談があっただけだという。また相談を受ける相談員も、紹介してもそれからは個人の問題なのでなかなか成果が上がらず、また離婚でもされたらそこまでの責任を持てないとかかなり疲れが見えてきた。相談員の方も、プライバシーに関わる問題だけになかなか自分の方から働きかけることができず、結局何もすることがないということだった。積極的に動く相談員もいたが、他の相談員との足並みが揃わず、情報を交換したりすることができないので動くに動けない状況にたたされた。「お見合いイベント」はなかなか女性の参加者が集まらず近隣の事業所に参加を呼びかけ何とか参加者を確保している状況だった。

プライバシーに関わることなので難しい問題であることに加え、町という狭い範囲だけでは限界があることも分かってきた。結局この窓口は2000年3月をもって閉鎖された。

これにかわって2000年4月から結婚仲人報奨金の交付が始まった。この交付を受けられるのは「町内に住所を有し、住民基本台帳に登録されている者で、結婚日現在の年齢が男子については30歳以上45歳未満の者、女子については28歳以上40歳未満の者」かつ「結婚後も町内に引き続き居住する予定である者」の仲人を執り行なった者である。1組の夫婦の仲人を執り行なうことに10万円が支給される。2000年12月現在でこれを受け取った人はいない。

V. 考察

私は、笠師保地区において男性の未婚率が高いことについて後継ぎとして地区に残ることを期待されていることがマイナスの要因となっているのではという推測を立てていた。

仲人の人に聞いた話では、若い女性は結婚後の居住地に、七尾市や金沢市などの、笠師保地区に比べると都会になる場所を希望するが多いという。お互いの希望や条件を満たした相手を用意しなくてはならない仲人の人は、そういった都会部での居住を希望する女性には笠師保地区に残らなくてはいけない男性を会わせない。見合いにおいては、お互

いが顔を合わせる段階までなかなかいかない。

しかし、恋愛結婚をして笠師保に嫁にきた女性に話を聞くと、笠師保地区に来ることにはそれほど抵抗がなかったという。一度出会って恋愛関係になってしまえば地区に残る、もしくは戻るということはそれほどマイナスの要因にはなりえないのだ。では何が未婚率を上げる原因となっているのだろうか。

私は出会いの場がないということではないのかと考えた。高校を卒業し、地区外に就職したり進学したりした人はそこで現在の結婚相手と知り合うことが多い。しかし、高校を出て家の後を継ぐために地区から通える範囲で職を見つけた人は、なかなか結婚相手となる人と出会うことが難しい。地区にいる女性は限られているし、出会いの形が多様化したといってもやはり多くは職場などで出会うものだ。しかし、女性の多くは後継ぎではないこともあり、地区外に出ることが多い。地区にずっと残っている人は、一度出た人や、地区外で生活している人と比べ、結婚相手となる人と知り合う機会がずっと少ないのだ。

これを危惧した町がイベントを開催したりしていたが、町が主体となるとどうしてもネットワークの幅が狭く、そこに含まれる人の数も少ないので、多くの出会いの機会を提供することは難しいだろう。

出会いの機会を増やすためにはどうしたらいいのだろうか。私は、高校を卒業したら一度地区外に出ることがよいのではないかと思う。地区外の大学や職場での出会いの機会は、地区内に比べると格段に多いだろう。もしくは、地区を外部に対して開いていくべきだと思う。地区や町内だけでなく、広く県内や県外の人が日常的に集まるような場所や機会をつくっていくのがいいのではないだろうか。

しかし、現在の子供たちが大人になる頃にはまた事情が変わっているだろう。現在の親世代は子どもに後継ぎをそれほど期待せず、外に出て行くことにも抵抗がない。小さい時から後継ぎになることを言い聞かせられた親や祖父母世代と違い、子ども世代は地区にとどまることにこだわって職を探す人は減るのではないのだろうか。

子ども世代が結婚する頃になると、後継ぎや地区に残るということを要因とした未婚ではなく、都市部に見られるような晩婚化が進むだろう。